
感覚麻痺

馬河童

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

感覚麻痺

【Nコード】

N3361E

【作者名】

馬河童

【あらすじ】

大学時代に初めて書いた中編小説です。どケチ青年が、ある事をきっかけに変わっていく様子を描く。

引越し（1話目しか掲載してません）（前書き）

本小説は、指摘を受けたため、18禁に引越しました！

引越し（1話目しか掲載してません）

池袋駅を出た俺の目の前に乞食が横たわって、哀れみを乞う眼差しを向けていた。それを見た俺は軽蔑を含んだ目つきでそいつを睨みつけた。

「ふざけんじゃねえ」

乞食を見てそう思った。お前ら結局怠けて稼いでないだけだろう。俺みたいにしつかりと儉約しろっていうんだよ。

俺は常日頃から周りの人間に「ケチ」という烙印を押されていた。現在暮らしている東京には大学生として出てきていたが、実家は貧乏で、親からの仕送りなんぞともに貰えない俺は、財布の紐を引き締め日々暮らすしかなかった。貸した金は期日を決めてキツチリと返してもらう、人には絶対におごらない、割り勘の時は消費税にまでこだわると、こういった一円単位にまでこだわる様が、いつの間にか俺に「ケチ」という称号を獲得させていた。

何とでも言う方がいい。TVが何かでもよくやっているけど、世に言う金持ちつてのは、その多くが「どケチ」なんだ。一円を笑う奴は一円に泣く。セコセコため込んだ奴が将来には勝つんだよ。俺はそう思うことで、周りの非難を退けていた。

俺はそんな性格からか、あまり多くの友人を持っていなかった。大学入学当初はよくありがちなパターンでテニスサークルに入り、多くの人間と仲良くなった。しかしそれは知り合って間もない頃にありがちな、上辺だけの付き合いだったようだ。三カ月もすると、金銭的な感覚の違いが元で、険悪な状態となり、次々と人が離れていった。俺はそのままサークルも辞め、大した交友関係もないままバイト三昧の生活を送っていた。バイトを繰り返しても生活するのがやっとという状態で、付き合ってくれそうな女もなく、一人で細々と過ごす他なかった。当然、一抹の寂しさを感じてはいた。し

かし俺も強がるタイプの人間だ。意地になって「俺は孤独ではない、孤高なのだ」と信じ込んでいた。

俺は乞食を見て腹を立てながら、池袋駅の地下構内を歩いていた。朝から晩まで、何時の間でもここは人が洪水のようにあふれている。特に学生や社会人の往来は激しい。皆が何をそんなに急いでいるのかと言いたくなる程、流れが早い。何度も障害物のような人間の波にぶつかり戻されながら進んだ。

俺はいつもここが凄く嫌な場所に感じる。元々、人込みは好きではないし、スリやひったくりが横行しているような噂もあり、切符を買うために財布から金を取り出すのにもイチイチ神経を使う。特に俺のような金への執着心が強い人間には、常に周りの目を気にしていなければならぬ感じがして、疲れる空間だった。何処からか後を付けられ、金を掠め取る瞬間を狙っている奴がいるような気さえしてくる。それでいて、俺の持っている金は少なかった。口々に金を所持していないのに、盗られてはたまらない。強烈な猜疑心が胸を渦巻いていた。そんな訳で、俺は人波を掻き分け、足早に地下道を駆け抜けた。

歩を進める内に、俺は現在通っているR教大学の門の前まで来ていた。今日は数少ない友人の一人とここで待ち合わせをしていたのだ。飾り作つたような門の前に立ち、到着してから数十分経つたが相手がなかなか姿を見せないの、俺はイライラし始めていた。腕を組みつつ派手な造りの校舎を見ると、さんざん俺達生徒から金を搾り取って、こんなものを建造していることに、さらに腹が立つてきた。

全く大学なんてものは金食い虫のような存在だ。あれやこれやと俺達から金を巻き上げて、まるで企業と変わらない。しかも見かけばかりを気にして、校舎の増築や門構えなんかはしょっちゅう修繕しているくせに、未だに学生の使用する教室にクーラーの一つも入っていない。本当にひどいもんだ。

そうして諸々のことにムカつきながらもしばらく待っていると「わりい、遅くなった」

俺の方に申し訳なさそうに手を合わせつつ歩いてきた男、こいつの名は鴨橋という。友人といったが、俺はこの男をあまり好ましく思っていないかった。こいつは俺と同じ地方出身者ながら、金持ちで鼻持ちならない男だった。金遣いも荒く、ちよつと女がいる席だと、気を引こうというのか、すぐに財布を取出し、何かをおごっていた。また、実家の父親は会社役員か何かをやっていて、相当に資産がある筈なのに

「俺の家は中流の下だよ」

などとほざき、周りの人間をしらけさせていた。さらに時間を守ることがなく、約束にもいつも平然と遅刻して来ていた。

それと人のことは聞きたがるくせに、自分のことは「秘密」などと言つて、何一つ喋らない。周りの気を引こうとしているのかも知れないが、かえつて逆効果になり、人を遠ざけていた。

では何故にこの男と付き合っているのかというと、まず奴は羽振りが良く、頻繁におごってくれることが大きかった。金のない俺としてはそれが非常にありがたかつたし助かつた。それとどういつか奴の方から俺に寄ってくるということもある。お互い金銭面で他人と違つた感覚を持ち、周りから半ばつまはじきの状態にされていたので、自然とくつついたのかも知れない。でも俺の心の中では奴を友人とは認めていなかったし、認めたくなかった。はっきり言つて、奴から良い面を見出だすことは限りなく困難な作業に近かつた。「金への変質度」、それだけが俺と奴を結び付けていると言っても過言ではなかつた。

今日の待ち合わせは奴からの誘いだつた。今朝いきなり電話をしてきて、バイトもなく暇だと言つたら「出てこいよ」と言われ、学校の前で待ち合わせをしたのだ。こいつの誘いに乗るなんて俺もどつかしているな、と思つたが、それが意外な効果をもたらすとは今の時点では夢にも思わなかつた。

< 本小説は、この先で指摘を受けたため、18禁に引っ越しました
>

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3361e/>

感覚麻痺

2011年9月27日03時13分発行